

『沖縄芸術の科学』第34号別刷

海外でのワークショップによる 琉球舞踊教習の実践と課題

比嘉いずみ

2022年3月

海外でのワークショップによる 琉球舞踊教習の実践と課題

比嘉 いずみ

Ryukyu Dance Teaching Training and Challenges through Overseas Workshops

Izumi HIGA

Not only the students but the author herself has also learned a lot about each university's curriculum and its successes through workshops, lectures, performances, and exchange programs that have taken place at universities abroad. This is a report of examples of how traditional cultures and performing arts are passed on to the next generation in universities, and educational institutions such as, elementary, junior high school, and high schools. It reports on actual experiences in Korea, Taiwan, Hawaii, and Bali that were valuable in reviewing ones own culture while getting to know about another culture.

はじめに

伝統芸能の実技習得には、長い年月をかけて鍛錬が必要とされるのが一般的な考えであるが、それを大学の4年間という短い期間で、流会派の異なる学生たちに有意義な教育を行うには、どのような内容が理想的なシステムなのかなど、筆者は最善の方法を模索しつづけてきた。

これまで、海外で行ってきた琉球舞踊のワークショップ、集中講義、公演など、学生たちとともに実践してきたことを通して、琉球芸能の魅力やそれが果たす役割、また教育機関における芸術表現のカリキュラムや方法など、新たな発見があった。

そうした海外の大学やその他の教育機関で行ったいくつかの交流事業を紹介しながら、あらためて伝統芸能を教育機関で教える意義と方法を考えてみたい。

1. 韓国・蔚山（ウルサン）大学校との交流・公演

(1) 概要

2014年9月11日(木)～16日(火)までの6日間、学生たちとともに韓国の蔚山市にある蔚山大学校を訪問した。

これは、韓国の学生および市民へ「琉球・沖縄文化」を伝えると同時に、学生が直接異文化に触れることによって韓国文化を深く理解し、交流を通して双方の学生が文化継承の意義を確認することを目的とした。

学生は1年次～大学院生の13名と、引率教員2名（波照間永吉附属研究所教授および筆者）含む計15名で参加し、県立芸大芸術振興財団の教育研究活動助成事業から一部助成を受けての事業であった。旅費は個々人の負担であったが、ほとんどの学生にとって初めての海外旅行・公演・ホームステイの試みであり、有意義な経験となった。

蔚山大学校は、韓国・慶尚南道の日本海に面した蔚山広域市にあり、1970年に創立された私立総合大学。自然科学、建築、社会科学、人文、経営、デザイン、医科、産経、生活科学、音楽、美術など12の学部、58専攻、6大学院を有しており、約1万5,000人の学生が在籍している。

(2) 実施内容

1) 1日目（9月11日／木曜日）

那覇空港を出発して約1時間40分で福岡空港に到着し、そこから国際線へ乗り換え、約55分で韓国釜山空港に到着した。空港の到着口には蔚山大学日本語学科の魯成煥教授と学生たちが、手づくりの幕を掲げて出迎えてくれた。蔚山大学が大型バスを手配してくださったことでスムーズに移動ができ、釜山から約1時間で蔚山へ到着した。その後、大学で待機していた日本語学科の学生たちと合流し、キャンパスを案内してもらった。学生寮や銀行、コンビニ、充実した品数の学生食堂など、蔚山大学の敷地の大きさと、ととのった環境を目の当たりにし、県立芸大の学生たちは戸惑いを覚えるほどであった。そして、1日目の夜は、蔚山大学学生主催の食事が開催され、双方の学生同士で親睦を深めた。

現地での宿泊は、魯教授のおはからいで、「寝食を共にしながら韓国文化をじかに体験していただきたい」とのことで、学生たちは各パートナー（蔚山大学日

本語・日本文学科学学生)の家で6日間ホームステイをしながら、お世話になった。当初、日本と韓国の政治的対立を危惧して躊躇する学生もいたが、学生の報告レポートによると、「家族の一員として温かく迎えてもらい、ホームステイだからこそ感じる事ができた韓国人の熱いおもてなしの心や優しさ、韓国の生活文化を体験することができてとてもよかった」などの感想があった。

沖縄の「^{クガニクトゥバ}黄金言葉」(諺)にある「^{チョーデー}イチャリバ兄弟」の精神と共通する文化が、韓国にもあることを学生たちは肌で感じ、文化交流の意義と大切さを学ぶことができたようで、貴重な経験であった。

2) 2日目(9月12日/金曜日) 蔚山大学校講堂にて琉球芸能公演

蔚山大学校講堂にて、満席の中で琉球芸能公演を行い、同大学の学生と一般市民合わせて約200名の観客が来場した。外国での公演ということで、わかりやすく鑑賞できるように、琉球古典音楽・舞踊・雑踊の10演目を、演目ごとに日本語で波照間教授が解説し、それを韓国語に通訳していただくという内容でプログラムを組んだ。フィナーレはカチャーシーで舞台と客席が一体となり、言葉の壁を越えて双方の学生たちが歓喜しながら終演となった。



琉球芸能公演終了後の記念撮影の様子

3) 3日目(9月13日/土曜日)・4日目(9月14日/日曜日)は自由行動

県芸の学生たちは、観光地や歴史的建造物・世界遺産の見学、ショッピングなど、それぞれのパートナーと相談のうえ行き先を決定し、自由時間を有効に活用

して韓国の文化と人々の暮らしぶりなど、五感を通して学んだ。

4) 5 日目 (9 月 15 日／月曜日) 日本語学科の講義に参加

魯成煥教授の講義で、蔚山大学と県立芸大の合同授業を実施していただき、韓国の伝統的なゲーム「ウンノリ」(日本の双六と似た遊び)を通して、日本語を話しながら文化交流を行う内容であった。県芸の学生は、流ちょうに日本語を話す韓国の学生たちに接して、「自分が話す日本語より、韓国の学生が話す日本語は、はるかに丁寧で、日本語らしさを兼ね備えていた。それを耳にしていると日本語の美しさと素晴らしさを感じた」との感想があった。日本の文化に興味をもち積極的に取り組む韓国の学生の学びの姿勢から、逆に日本文化の素晴らしさに気づく機会となり、国際交流の意義を感じる時間でもあった。韓国文化の授業見学、琉球芸能公演、ホームステイなど、学生同士の交流を通じて、互いの文化を理解することができた。

5) 蔚山大学日本語学科学生への沖縄訪問 (ホームステイ)

われわれ訪問の翌年、2015 年 1 月 26 日(月)～30 日(金)の期間、韓国蔚山大学の教員と学生たちが沖縄を訪問し、互いに再会を喜んだ。韓国で経験したときと同様、各パートナーの家にホームステイをして沖縄の文化をじかに体験してもらい、絆を深めることができた。このご縁を大切につないでいきたいと感じた。

滞在日程

日 時	日 程
1 月 26 日 (月)	・ 那覇空港に到着後、県立芸大比嘉康春学長を表敬訪問し、首里城を見学 ・ 蔚山大学の学生たちは、各パートナーの家に分散して宿泊(名護市、浦添市、那覇市、豊見城市、南風原町、南城市)
1 月 27 日 (火)	・ 午前午後とも各パートナーと自由行動 ・ 19 時より浦添市「ヒルズバー」にて県立芸大学生主催の歓迎会を開催
1 月 28 日 (水)	・ 終日各パートナーと自由行動(「美ら海水族館」など、主に中北部を観光)
1 月 29 日 (木)	・ 16 時～17 時、県立芸大にて三線と琉球舞踊のワークショップを開催 ・ 沖芸大学食にてお別れ会を開催し、那覇市「かずさん亭」で二次会
1 月 30 日 (金)	・ 那覇空港で見送り



首里城見学



琉球舞踊ワークショップの様様

(3) 課題と展望

この事業では、蔚山大学校とのコンタクトを教員側（波照間永吉教授および筆者）で行い、企画運営、マネジメントは学生有志が中心となって行った。旅行チケットや海外保険・運搬物保険の加入、荷物の発送、税関通過時の資料作成など、学生たちは経験したことのない作業を協力しながら積極的に行った。

公演に向けてプログラムを決め、役割分担と練習日程の調整、舞台進行などを経験する機会はあったが、今回のようなマネジメント実践は初めての経験で、海外での公演手順や方法を学ぶ貴重な機会となった。

また、琉球芸能公演を行う際、現場に専門の舞台スタッフがいらない中で、現地の学生と教員が親身に音響・照明・楽屋設備を担当してくださった。学生は舞台をはじめ、さまざまな経験と交流・研修によって、韓国の方々の温かさや文化に触れることができた。双方の学生とも、独自の文化を継承する意義を再確認した、と報告書に記載があった。

この経験から、実践教育は学生たちにとって貴重な経験であることを実感した。今後は、アートマネジメントに関する手順や方法・助成金の活用方法などを、本学の専任教員からもアドバイスしていただけるよう連携をはかり、学生たちの積極的な文化発信と舞台経験の場をサポートできるよう、環境をととのえていく必要があると感じた。

2. 台湾・国立台北芸術大学での講義・公演・交流

2-1 2014年12月 琉球舞踊の集中講義

(1) 概要

2014年12月22日(月)～2015年1月8日(木)までの18日間、沖縄県立芸術大学と姉妹校である国立台北芸術大学にて、実技17回・講義1回の「琉球舞踊の集中講義」を行う貴重な機会をいただいた。海外の大学で琉球舞踊の集中講義を行うことは初めてではあったが、沖縄からもっとも近い外国で、文化や歴史的つながりも深いということもあり、親しみを感じた。

国立台北芸術大学は、1982年に「国立芸術学院」として創設され、2001年に「国立台北芸術大学」と改称。台湾の文化的遺産を基盤に、新しい現代の芸術を生み出す高度な芸術教育を目的として生まれ変わった。現在では舞踊科、音楽科、伝統音楽科、演劇科、美術科、舞台美術&テクノロジー科の6学科で組織されている(教員156人)。

2011年には沖縄県立芸術大学と姉妹校締結を行い、双方で留学生の受け入れ・派遣を行うほか、教員間の展示会や交流も深めている。

国立台北芸術大学舞踊科について

国立台北芸術大学では、一貫芸術実践教育(高校3年+大学4年=7年)が実施されており、高校生が大学で実技や講義を受講する制度がある。東洋の伝統と西欧芸術の厳しい訓練に重点を置いており、理論と技術、理論と実践の両方の科目がある。自由な創造と研究のための環境下で、伝統文化のエッセンスを失わない、多様な分野・様式の作品を創作することを奨励しており、開学以来、台湾の芸術教育分野で重要な位置を占めている。

国立台北芸術大学舞踊科は、台湾にある4つの舞踊専科の1つで、芸術高校に60名、学部130名、大学院10名ほど、合計およそ200名の学生が在籍している。講師は国内外の突出した芸術家が指導にあたっており、舞踊のための設備がととのった劇場、スタジオ・シアター、ダンススタジオが9つあり、ほかに教室も備えている。

舞踊科の学位を取得するためには、5年間の実技と振付のプログラム、実技を専門とする3年間の高校、実技・振付とダンステクノロジーを専攻する各課程が

あり、パフォーマーやダンス研究家を育成するため、身体訓練と創造的な表現に重点を置いている。また、国際的な視野に立ち、ダンス研究のほか、学生がより豊かに理解できるよう、国内外の交換留学生プログラムをもち、高校から大学を卒業するまでに146単位を取得する。

実技プログラムでは、モダンダンス、京劇、太極導引、インプロビゼーション、民族舞踊（原住民）などの科目があり、大学生は自分の専攻を選ぶ前に、モダンダンス、クラシックバレエ、京劇の3科目の試験に合格しなくてはならない。また1年生と2年生は全員、毎日、太極導引を練習することが義務づけられている。

理論面では、東西の舞踊史、舞踊教授法、ダンス音楽、解剖学と動作学、記譜法（ラバノーテーション）、制作のほか、コンピューターメディア、美学、美術鑑賞、そして文学、ジャズ、コンピューターミュージックの鑑賞と創作など、多種多様な科目がある。中国の伝統舞踊に加え、台湾と外国の舞踊も柔軟に取り入れた幅広いプログラムとなっている。卒業制作として、振付と上演、舞踊教育、または専攻分野の卒業論文が課せられている。

(2) 実施内容

1) 琉球舞踊の集中講義は、5つの専攻と学年の違うクラスで実施した

A：大学院生 15名クラス（女性のみ）

— 合計11回の授業で「浜千鳥」「かぎやで風」の2演目を指導

大学院生のクラスは女性のみで、みな明るく、日本や沖縄への関心も高く興味をもち、積極的に授業に参加していた。11回の講義のうち、4回で「浜千鳥」を覚え、筆者が持参した着物でウシンチーの着付けと、頭に巻く紫長サージの締め方を覚え、各自でできるようになった。そして学生たちの希望で、髪結い（男性のカタカシラと、女性のカラジ結い）の講義を1コマ行った。

また後半の4回で「かぎやで風」を覚え、練習着と半幅帯の締め方を習得した。最後の2コマは、成果発表会に向けての練習や地謡合わせ（交換留学時に三線を学んだ学生1名とともに）を行った。

B：学部1年生 28名クラス（実技系／男性11名・女性17名）

— 合計3回の授業で「前の浜」1演目を指導

学部1年生のクラスでは、二歳踊り「前の浜」を、わずか3回（90分授業）の授業で手順を覚え、曲に合わせて踊ることができた。それは、実技系の学生の

ほとんどが、西洋のバレエを幼少から学び、体の基礎づくりができているためである。加えて大学では、太極拳・京劇・武術といった伝統の技芸を学んでいるため、安定した体幹、柔軟性、表現力など、身体基礎の高さが備わっているのである。

この授業を通して、基礎力がいかに大切かを学ぶことができ、本学で行っている授業のカリキュラムの組み立てについても、大いに参考となった。

C：大学院生クラス（理論系）

— 1 回のみ「琉球舞踊の鑑賞と説明」「かぎやで風」「浜千鳥」「前の浜」を指導

理論系の大学院生のクラスは 1 回のみの講義であった。はじめに琉球舞踊の種類や概要を伝えたあと、違いや特徴を感じてもらうため、「かぎやで風」「浜千鳥」「前の浜」の 3 演目を実演した。そのあと、琉球舞踊の動作では、体のどの部分を使っているのか、筋肉の構造など、クラス担任の教授の質問に対し、学生たちが真剣に討論し、答えていた。

D：学部 3・4 年生 15 名クラス（実技系）

— 1 回のみの授業で「黒島口説」の囃子と踊りを指導

学部 3・4 年生 15 名（男女混合）クラスは、1 回のみの授業であった。台湾原住民の 1 つであるプユマ族の民族舞踊と歌を学んでいるということで、歌のある踊りを教えてほしいとのリクエストがあり、「黒島口説」の 1 節の囃子を説明して歌詞を覚えてもらい、そのあと踊りと合わせて演じた。沖縄の民俗舞踊と、台湾の原住民の歌や踊りは、共通する部分も多く、学生たちは楽しみながら笑顔で元気よく歌い踊っていた。

E：学部 3・4 年生 8 名クラス（実技系）

— 1 回のみの授業で古典舞踊「瓦屋」と南管オペラを比較しながらの指導

学部 3・4 年生 8 名クラスは、1 回のみの授業。学生たちは授業で台湾の宮廷音楽に合わせて踊る「南管オペラ」（手足の繊細なしぐさを駆使した、踊り・歌・芝居・音楽を織りまぜた、中国福建省にはじまる伝統演劇）を習得しているとのことで、それと比較研究するために、古典舞踊の「瓦屋」を体験してもらった。

南管オペラはゆったりとした音楽に合わせて内面の深い思いを表現するという特徴があり、琉球舞踊と共通する部分が見られた。身体表現では腰を落とし丹田に意識を向けるという部分が、よく似ていると感じた。

2) 「琉球舞踊について」の講演会

12月29日（月／10：30～12：10）、ダンススタジオにて、高校生と大学生約80名を対象に「琉球舞踊について」の講演を行った。

現在の台湾では、原住民の歌や踊りなどの伝統芸能より、西洋のバレエを身につける若者が多くいることから「伝統を伝えることの必要性」という視点から話していただきたい、との要望が趙綺芳先生から事前にあった。

そこで、2013年に行った筆者のリサイタル映像を上映しながら、琉球の伝統芸能を継承する一人として、筆者自身の体験を通して感じたことや、琉球舞踊の歴史等をまじえて話し、「琉球の人々にとって、多くの困難を乗り越えてきた歴史の中で、歌や踊りは勇気と希望を与えるもので、精神的な支えとなり、生きる力となった。そして現在では、人と人を結ぶ文化遺産として、沖縄はもとより、世界各地に移民として暮らす県系人たちによって、大切に継承されている」という内容で締めくくった。



琉球舞踊についての講演



衣装を着用しての練習風景

3) 集中講義の成果発表会

11回の授業で「浜千鳥」「かぎやで風」の2演目を習得した大学院生（15名クラス／女性のみ）と、3回の授業で「前の浜」1演目を習得した学部1年生（28名クラス／男性11名・女性17名）の受講生により、大稽古場において集中講義の成果発表会を開催した。プログラムは、たまたま台湾での研修旅行に来ていた兼島翔子さん（沖縄県立芸術大学博士課程在籍）にも参加してもらい、琉球古典舞踊3題と、雑踊り2題で構成した。

集中講義で琉球舞踊を学んだ学生たちは、初舞台で緊張した様子ではあったが、それぞれの演目のリズム感や特徴を体得し、歌詞の内容を理解して表現ができた

ことに、達成感を感じていた様子であった。そして最後は、カチャーシーで会場が一体となり、沖縄の歌と踊りを楽しむことができた。

プログラムは以下の通りである。

1. 「かぎやで風」 受講生 5 名（着物・半帯を着用）

（※地謡の歌三線は、沖縄県立芸大に留学の経験のある、鄭文瑜さんと趙先生のご子息が演奏した。）

2. 「かせかけ」 県芸学生 兼島翔子（沖縄県立芸術大学博士課程在籍）

3. 「浜千鳥」 受講生 10 名（紺地緋・紫長サージを着用）

4. 「前の浜」 受講生 28 名（上下黒の体操着）

5. 「鳩間節」 講師 比嘉いずみ

(3) 課題と展望

台北芸術大学では、一貫芸術実践教育（高校 3 年 + 大学 4 年 = 7 年）が実施されており、高校生が大学で実技や講義を受講する制度がある。実技を修得するには、時間と年月をかけて練り上げることが必要であり、高校 3 年間で基礎力を身につけると、大学の 4 年間では、その基礎の上に、さらにさまざまな身体表現法や心技体の確立、表現法の分析など、多角的視点で芸術表現を学び研究することが可能であると感じた。

特に学部 1 年生 28 名クラスで行った 3 回の授業で学生たちが「前の浜」を習得できるようになった経験は、本学の授業カリキュラムの組み立てについても、大いに参考となる内容であった。

沖縄では伝統芸能を専科とする高校が 1 校（県立南風原高等学校）のみであり、同校と県芸の連携もなかなか取れていないのが現状である。伝統芸能を継承するうえでの人材育成の問題は大きく、幼少の頃から稽古場に入門し、芸能を楽しみながら学び、幼・小・中・高校とつづけている子供たちは多くいる。しかし、将来の職業として選択するには、経済的な面を含めて解決できていない問題がたくさんある。直結する活躍の場が少なく、進学校を決める際には、特技を生かしながら高校や大学進学を希望する学生は、かなり少ないのが現状である。この問題をいかに解決できるかということも、今後の課題として前向きに取り組んでいきたい。

台北芸術大学の卒業生が活躍するコンテンポラリーダンスカンパニー「雲門舞集（クラウドゲイト舞踊団）」の芸術監督・林懷民氏は、台北芸術大学の舞踊科

の創設者である。林氏は「人は未来を見る目と国際的な視野をもたずに偉大な芸術家にはなれない」という信念をもち、学生が多様な舞踊に触れ、それぞれ独自のビジョンと創造的なセンスを養い、舞踊芸術家に育つためのカリキュラムの充実が必要であるとの理念のもとに、カリキュラムを構築した。それは、現在も舞踊科の方針として引き継がれ実施されている。

林氏が芸術監督をつとめる雲門舞集は、「西洋の体をもって、東洋の思想を表現する」という理念を掲げ、世界各国で活躍する有名な舞踊集団であり、アジアでもっとも芸術性の高い舞踊団として称賛されている。その中には、台北芸術大学の卒業生が多く活躍している。そして第一線を退いた卒業生が、再び大学で指導者として教鞭を執り、林氏の創作した、台湾の歴史にもとづいた芸術作品を通して、独自の感性と表現の技を伝授している。まさに、芸術大学と社会との連携がなされており、大学で学んだ知識と技を生かしながらアーティストとして活躍し、さらに表現者としてさまざまな舞台で実績を積み場が構築されているのである。琉球舞踊の今後の発展のためには、台湾の現状から学ぶことが多くあると思う。

また、台北芸術大学の趙綺芳先生ご夫妻とともに、台湾台東地区の原住民プユマ族の新年を祝う伝統行事に参加した。

台湾では、地域の伝統行事に参加する若者が年々減少し、先住民が受け継いできた文化の継承が危惧されている。台東地区のプユマ族の伝統行事も一度途絶えたが、これを復活させ次世代に継承する取り組みとして、小学校低学年の頃に将来のリーダーを指名し、その子を中心に子供たちが伝統行事・芸能を20年の歳月をかけて継承するというプロジェクトを実施している。少数民族の伝統文化を尊重する施策と、その具体的な方法を目の当たり^{はた}にした。伝統文化の継承に対する取り組みがおごなりでなく、その本気度が端からも感じられ、琉球・沖縄の文化伝承の問題について考えさせられた。

行事は元旦の夕方から深夜にかけて行われ、円陣を組んで囃しながら、繰り返して踊る。筆者も輪の中に参加させてもらった。とても寒い夜であったが体は次第に熱くなり、人と人とのつながりと喜びを分かち合うことで、一体感とともにとても嬉しい気持ちが湧き起こってきた。そのとき、あらためて文化の継承には長い年月と、それを受け継ぐ使命と責任感が大切であると感じた。

2-2 2017年10月 国立台北芸術大学でのワークショップと「開渡芸術祭」への参加

(1) 概要

2017年10月26日(木)～2017年10月30日(月)までの5日間、沖縄県立芸術大学の姉妹校である国立台北芸術大学を訪問した。内容は、地元の小学生を対象にした琉球舞踊ワークショップや、舞踏学部の学生を対象とした比較舞踊実技での琉球舞踊講義、そして「開渡芸術祭」の一環として、大学のダンスシアターにおいて「琉球芸能公演」を2日間実施するものであった。参加メンバーは、本学教員の久万田晋教授、阿嘉修准教授、筆者、それに非常勤講師3名(長嶺亮子・佐辺良和・池宮一)を含む6名と、大学院生3名(山里静香・高井賢太郎・親川遙)、学部生12名、卒業生4名の合計25名で、本学の教育研究事業費と台北芸術大学の助成金を活用して行った。

実施にあたって、琉球芸能専攻の大学院生をリーダーとする学生スタッフの企画立案によって琉球芸能に関するコンテンツを作成し、出演者の選定から公演に至るまで、諸課程の準備作業を学生中心に進めることで、実践的なアートマネジメント能力を育成するという教育的効果も目的とした。さらに、世界文化遺産に認定された、琉球芸能の中核である組踊や琉球舞踊の舞台公演を通じて、琉球芸能についての普及啓蒙の効果的な方法を探る実践的研究として位置づけ実施した。

(2) 実施内容

1) 地元の小学生を対象としたワークショップ

10月27日(金)、筆者を含めワークショップに参加する9名は1日早く台湾入りし、地元の小学生(3～4年生)約80名を対象に、台北芸術大学のダンスシアターで90分のワークショップを行った。

はじめに、古典舞踊「瓦屋」・雑踊「谷茶前」・「浜千鳥」の3演目を披露し、次に琉球音楽で使用する三線・箏・笛・胡弓・太鼓の楽器紹介を行った。そのあと、琉球舞踊の所作の意味や特徴などをレクチャーし、生徒たちには、その場で立ってもらい地謡の音楽に合わせて踊ってもらった。そして会場から希望者をつのり、8名の生徒に衣装を着用させ、大学生と一緒に「浜千鳥」を踊る体験を、舞台上で行った。参加した生徒は一生懸命に挑戦し、会場からは、笑い声とともに大き

な拍手があり、琉球芸能をそれぞれが楽しんでいる様子がうかがえた。

2) 舞踏学部学生を対象として「比較舞踊実技」の講義

10月28日(土)の午前は、大学生約70名を対象に「比較舞踊」の授業を行った。この講義では、まずジャワ舞踊の講師による実技指導が60分行われた。コーディネーター担当の先生のおはからいで、4名の学生とともに筆者も参加させていただいた。重心・体の軸の保ち方・手の動き・左右対称の動作・歩行など、琉球舞踊と共通する部分が多く、アジア芸能に共通する身体表現と、ジャワ舞踊の特徴を学ぶことできた。

10分間の休憩後、琉球舞踊の指導を約60分行った。はじめに基本である摺り足を、本学の学生たちに模範演技をしてもらい、台湾の学生たちも一緒に繰り返し練習を行った。その後に扇子を使って踊る琉球舞踊の代表的な祝儀舞踊「かぎやで風」を教材に指導を行った。台北芸大舞踏学部の学生たちは、幼少時からバレエを学んでいる学生がほとんどで、柔軟性と体幹の安定性など身体表現の基本がしっかりできており、琉球舞踊の習得にそれほど時間はかからなかった。

2014年の12月に行った集中講義でも実感したことであるが、身体表現をする者にとって体の軸(体幹)を安定させ、その基礎や根幹を確立することで、他ジャンルの身体表現との比較が可能となり、その特徴をつかむことができることを再認識した。大学における琉球舞踊の指導法をあらためて見直し、基礎力を身につけることがいかに大切かを学ぶ貴重な機会となった。

3) 国立台北芸術大学の舞踏学部ダンスシアターで行った「琉球芸能公演」

10月28日(土/19:30)、10月29日(日/14:30)の2回、学生ほか一般を対象とした「琉球芸能公演」を行い、両日で400名の観客が鑑賞した。前回、2016年10月に同じ「開渡芸術祭」に参加した際は、10名(教員3名・学生7名)の少人数で「琉球舞踊の世界～古典から創作へ繋ぐ～」というテーマで、古典舞踊・雑踊り・創作舞踊の7演目でプログラムを構成したが、これが台北芸術大学側から高い評価を受け、「次回はぜひ組踊も上演してほしい」との要請を受けて、このたび、2度目となる開渡芸術祭参加に至った。今回の公演タイトルは「琉球伝統演劇と舞踊の世界」とし、1部に舞踊を5演目、2部に組踊「万歳敵討」を上演した。プログラム構成は、台湾の方々にも理解しやすい内容の演目という観点から、「忠孝」をテーマにした組踊と、代表的な古典舞踊のほか、アジア共通

の稲作をテーマにした創作舞踊「豊穰」を選んだ。特に台詞をとまなう組踊では、中国語の字幕付きビデオを上映しながら上演した。

琉球舞踊では沖縄と台湾双方の教員が、司会進行をつとめて1つ1つ丁寧に解説を行った。フィナーレではカチャーシーで舞台と会場が一体となり、歓喜の中で幕を下ろした。当日行ったアンケートには観客から多くの感想が寄せられ、公演の成功と今後の課題を確認することができた。

（アンケートよりの抜粋） 伝統を保っていることに感動した／大学が日本との交流の機会を増やしてほしい、舞踊の方々と交流がしたい／琉球のいろいろな伝統が好き、台湾と琉球は近いが見る機会が少ない、もっと見たい、また来てください／字幕スーパーが左右にあるとよかった／教育的価値が高く、他の芸術活動と結び付け推し進める価値がある。創作舞踊の音楽や動作のどの部分が新しいのかもっと知りたい、とても感動した／など。

(3) 課題と展望

この事業を通して、次のようなことを学んだ。

今回、総勢 25 名（地謡 8 名、立方 13 名、舞台監督 1 名、字幕 1 名・解説 1 名・監修 1 名）という大人数での公演であった。現地の舞台の大きさや公演演目からも、妥当な人数であり、内容の充実した公演を行うことができた。

特に海外でわかりやすく演目の内容を伝える字幕スーパーの手配と、舞台監督によるステージ情報交換で、スムーズに質の高い公演を実施することができた。学部学生・大学院生・教員および非常勤講師・卒業生との共演による海外公演の中で、特に現役の学生たちにとっては、舞台のみならずさまざまな場面で協力態勢を肌で感じ学ぶ絶好の機会であった。学生が中心となって企画立案し、台湾側のスタッフも学生が中心となって双方で連絡を取りつつ、パンフレット作成や宿泊施設、荷物発送の準備、練習日程の調整など、実践的なアートマネジメントを通して、海外における公演のノウハウを学ぶことができた。

帰国後、学生たちの意識が変わり、長い年月をかけて継承されてきた独自の文化の大切さやその伝え方、見聞を広め他国との交流をもつ意義など、それぞれが今回の経験を通して、多くのことを学び得たと実感した。今後もこのような国際交流公演を行うことで、伝統芸能を継承する意義を確認し、学生たちのモチベーションを向上させる機会を継続して実施できるよう、積極的に取り組んでいきたい。

3. ハワイ大学および東西センターでの講義・公演・交流

3-1 ハワイ沖縄姉妹提携 30 周年記念事業への参加

(1) 概要

2015 年 7 月 8 日 (水) ～ 2015 年 7 月 14 日 (火) の 7 日間、沖縄県による主催で、ハワイ沖縄姉妹都市提携 30 周年記念式典・レセプション・関係機関訪問等の事業に参加した。県立芸大から比嘉康春学長、照喜名一事務局長、OB2 名、大学院生 6 名、舞台監督 1 名、そして筆者の合計 12 名で、記念式典における祝儀舞踊のほか、ハワイ沖縄センターにおいて県費留学 OB との合同芸能公演、そして県人会を対象としたワークショップを行った。

1900 年、最初の沖縄移民 26 人が農民としてハワイに渡り、20 年後には県系人が 2 万人を超え、現在では 4 万人と推定される。望郷の思いと助け合いの精神で発足した各市町村単位のクラブは 50 団体あり、全体を統括する組織としてハワイ沖縄連合会 (HUOA) が 1951 年に設立されている。

1990 年にはハワイ沖縄センターが設立され、芸能公演や就任式などの各種催しが行われ、平日は三線教室や琉球舞踊教室、ウチナーグチ教室、空手・古武道、生け花など、ウチナンチュの集いの場として、広く活用され、親しまれている。

(2) 実施内容

1) ハワイ大学マノア校と東西センター表敬訪問

7 月 10 日 (金) 沖縄県から翁長知事、秘書、通訳、県立芸大から比嘉学長、照喜名事務局長、そして筆者を含む 7 名で、ハワイ大学マノア校と東西センターを表敬訪問した。

県立芸大では、琉球芸能、美術工芸、沖縄学、言語普及などの分野で、同大およびセンターと 2016 年 7 月に交流事業の覚書締結に向けて調整をすすめており、今回 30 周年の記念式典に合わせて協力を要請することを目的とした。覚書に盛り込む予定の 4 分野のうち、言語普及については、英語普及で使われなくなっていたハワイ語が、各教科をハワイ語で教えるイマージョン教育を活用して復興した実績・研究例が念頭にある。琉球語は、琉球芸能、沖縄文化の土台となっているものの、使えない世代が増えている琉球語 (シマクトゥバ) を普及させる参考例とするためである。

また、多くのハワイの県系人にも受け継がれる琉球古典音楽、琉球舞踊などの琉球芸能がどのように発展してきたか、歌詞に盛り込まれた奥深い意味の研究についての情報交換を行う。また沖縄学では『おもろさうし』の研究などを行い、英文による研究発表で広く英語圏に発信することにもめざす。

ハワイ大学マノア校のロバート・プロマン校長から、4分野の学術交流について「どれも有望であり支援をしたい。特に言語の研究に関心をもった。言語の重要性を理解し、アイデンティティーに寄与していることに関し研究を進めるのは素晴らしい」との意見があった。

東西センターのチャールズ・モリソン総長からは、「沖縄に東西センターがあれば非常に素晴らしい。究極の目的は平和を探求することだ。相互理解を深め大きな問題に立ち向かっていくことだから」との提案があり、翁長知事も実現へ取り組む考えを示した。

2) ハワイ沖縄センター 25 周年記念事業

7月11日(土)ハワイ沖縄センターにて、県立芸大の比嘉学長と教員・学生10名、そして県費留学OBのみなさん(三線・舞踊)と一緒に、琉球芸能公演を実施した。県費留学OBに対しては、留学時に踊ったことのある演目から2曲を事前に確認し、現地に到着してから手順の確認と地謡合わせを2日間で行い、本番を迎えた。

一緒に舞台に立った県費留学OBは、「10年ぶりに共演させてもらい、これも沖縄の芸能が縁をつないでくれた。本当に幸せ」と感慨深く話していた。また今回参加した県立芸大の学生からは、「琉球芸能を通して同じ舞台に立てたことで、再び気持ちが1つになれば、芸能の素晴らしさを感じた」との感想があった。

このような経験を通して、伝統芸能を継承する意義とその魅力をあらためて実感し、また、双方のモチベーション向上にもつながることを、再確認できた。

第1部 プログラム (11:20～11:40)

1. 「かぎやで風」 地謡：比嘉康春 新垣俊道 喜納吏一 県費留学OB (13名)
舞踊：比嘉いずみ 伊藝武士 県費留学OB (4名)
2. 「二歳ぜい」 喜納彩華 島尻紀希
3. 組踊抜粋舞踊 「久志の若按司道行口説」 玉城知世 伊藝武士 嘉数幸雅

第2部 プログラム (16:10～16:30)

1. 「しゅんどう」 喜納彩華 島尻紀希 嘉数愛美 嘉数幸雅

- 2.「鳩間節」 比嘉いずみ
3.「黒島口説」 喜納彩華 島尻紀希 嘉数愛美 玉城知世 伊藝武士
嘉数幸雅 渡久地ダズマン（県費留学 OB）

3) 芸能関係者を対象とした琉装ワークショップ

7月11日(土)公演終了後に、ハワイ芸能関係者からの要望で、琉装（髪結・化粧・着付け）のワークショップを教員・学生で2時間（18:00～20:00）行った。これは2015年3月に県費留学OBから、スキルアップのためにワークショップを開催してほしいとの要請を受け、同様のワークショップを行った経緯があり、それに引きつづき2度目の開催となった。

会場は、ハワイ沖縄センター隣にある「せりきゃく茶屋」。各自で衣装や化粧品・鏡などの必需品を持参した。時間が限られていたため、それぞれの希望する内容に分かれて、同時進行でワークショップを進めた。受講生たちはビデオでその様子を撮影し、今後の活動資料とするなど積極的に取り組み、ハワイにおける琉球芸能への関心の高さを感じた。

同時に、芸大の学生たちもその期待に応えようと積極的に扮装実習で習得したカムロ・カタカシラ・マー結などの結髪を手際よく教え、紅型衣装やあずまあげ・大帯の結び方などの扮装、そして舞台化粧の技法を筆者とともに指導した。こうしたリカレント教育を継続して行うことは、伝統芸能の発展にもつながり、また県立芸大の役割でもあると実感し、今後も実施できるよう態勢をととのえていきたいと思う。

(3) 課題と展望

この事業に参加した学生のレポートから、今回の事業に参加した意義を確認することができる。以下に抄録する。

「ハワイ大学には先住民の言語や文化を学ぶカリキュラムがあり、独自の文化を重んじ継承することを目的とした授業や専攻があることを知った。私たちも独自の伝統文化・芸能を大学で学んでいるが、今回この事業に参加し、県知事や芸大学長がハワイ大学で、文化の基層であるシマクトゥバを継承する方法を、ハワイの言語復興を参考に進めていくことが話し合われたと聞いて、私たちもできることから始めなければいけないと感じた。また、パールハーバーの資料館を見学し、歴史を知ること、それが一番文化を理解するために必要なことだと実感し

た。今回の公演や交流を通して、現在受け継がれている芸能のルーツを再確認するきっかけともなり、あらためて困難を乗り越えて歌や踊りに励まされ、その芸能や文化を守り伝えてきた先人のことを考えると、琉球芸能を学んでいることに誇りを持ち、つなげていこうと思った。」(大学院1年次)

この学生は、幼少から楽しんで学びつづけてきた伝統文化の価値を海外で再確認し、また大学での学びの意識を高めるとともに、その方向性をみずから気づく貴重な体験を得た。

沖縄に生まれ育った子供たちは、日常的にあふれる歌や踊り、沖縄の文化について、あまり関心がなく、また学校教育の小・中・高校においては学力向上に重きを置き、独自の伝統文化について見聞を広める機会がほとんどないのが現状である。しかし、沖縄から離れてはじめて、文化のもつ力や、望郷の念をつなぐのが歌や踊り、そして故郷の言葉であることに気づく。社会や自然現象の変化が目まぐるしい現在において、たくましく優しく共存できる人材育成を考え、独自の文化について教え導くことが、これからの教育機関に求められている時代になっていると感じた。そして大学における伝統芸能・文化の教育の在り方も、今後ハワイの文化復興を参考にしながら、筆者自身できるところから取り組んでいきたいと思った。

3-2 沖縄県立芸術大学とハワイ大学および東西センターとの 教育研究交流事業

(1) 概要

2016年9月19日(月)～28日(水)の7日間、沖縄県立芸術大学開学30周年記念事業の一環として、ハワイ大学、東西センターなどハワイ州の学術機関等との交流事業を目的に、ハワイ沖縄連合会の支援を受けて実施された。この事業は前年度2015年7月に、沖縄県とハワイ州姉妹提携30周年記念事業につづく国際交流事業として、沖縄県より助成を受けての実施となった。

県立芸大では美術工芸・音楽の両学部でプロジェクトチームを結成し、2016年3月に「芸大のお宝展」と題して沖縄県立博物館美術館で沖縄県民向けに事前展覧会を開催し、2016年9月の海外での本番実施がスムーズに行えるよう、段階的に準備態勢をととのえた。

(2) 実施内容

1) ハワイ大学マノア校との交流協定 (MOU) 締結

2016年9月、沖縄県立芸術大学・比嘉康春学長と、ハワイ大学マノア校のブレイ・ヴローマン学長とのあいだで調印を行い、教員・学生の交流、共同研究プログラム等での協力推進を目的に、双方の大学間で交流協定を締結した（これは、前年の2015年7月に訪問した際、波照間永吉教授・小西潤子教授・仲本賢教授・筆者らとハワイ大学関係部局の責任者とのあいだで調整が進められてきたもので、今回、交流協定について確認が行われ、実施のはこびとなったものである）。

2) 東西センターとの共催による展覧会「綾虹―芸大のお宝展 in ハワイ―」

2016年9月25日(日)～2017年1月9日(月)、ハワイ大学の敷地内にある、東西センターのギャラリーにて、教員による作品や県立芸大所蔵品を海外で初めて展示した。琉球舞踊・組踊衣装11点(琉球芸能専攻)、陶磁器5点(芸術資料館)、工芸作品10点(工芸専攻)、八重山地域の民俗芸能の仮面6点とその写真・映像資料(附属研究所)等、ハワイの人々の目に触れることがなかった貴重な作品が沖縄から持ち込まれた。また、ハワイ沖縄連合会の協力により、在ハワイの工芸品・琉球楽器・獅子が合わせて展示され、3カ月間の期間に多くの方が訪れた。

さらに、琉球古典芸能の代表的な演目をはじめ、民俗芸能(ダートゥーダー、獅子舞)、創作舞踊をハワイ大学等教育研究機関の会場で披露し、その魅力を伝えとともに、展覧会への理解を深めることを目的とし実施した。

この事業に、県立芸大比嘉康春学長はじめ、照喜名一事務局長、波照間永吉前附属研究所長ほか、美術工芸学部(仲本賢教授ほか)・音楽学部(小西潤子教授ほか)教員および助手11名、琉球芸能専攻学生10名、OB3名、舞台監督1名が参加した。

東西センターは、米国、アジア、太平洋地域の教育研究を通しての相互理解のために1960年アメリカ議会によって設立された。文化平和活動を推進するとともに、これまで多くの沖縄県からのハワイ留学生を支援してきた経緯がある。

3) 東西センターとの共催によるハワイ大学ヒロ校でのワークショップ (ハワイ島)

9月20日(火)ハワイ大学ヒロ校の15名の学生が参加し、県立芸大の学生との交流を目的とした、琉球芸能ワークショップを行った。

はじめに芸大の学生が「黒島口説」を踊り、ハワイの学生に鑑賞してもらい所

作や体づかいを教えて、一緒に音楽に合わせて踊った。次に琉球音楽の楽器紹介を行い、1つ1つの音色や特徴を説明した。最後は、ハワイ大学の学生たちがフラやヒップホップダンス、バレエなど、それぞれが得意とするジャンルのダンスを披露してくれ、互いの文化の異なる身体表現と音楽に触れ楽しんだ。



ハワイ大学ヒロ校でのワークショップ



展示会場前にて沖縄メンバー

4) 東西センターとの共催による琉球芸能公演「綾虹の踊り」(ハワイ島)

9月21日(水) ハワイ大学ヒロ校の劇場にて1回目の琉球芸能公演を開催し、学生をはじめ沖縄県人会など約600名の観客が来場した。

プログラムは、第1部に古典舞踊4題と、雑踊りを3題、第2部には創作舞踊と民俗芸能を各2演目紹介した。公演の最中はあまり観客の反応がなく、多少の不安をいだきながらプログラムを進めていたが、終了後はスタンディングオベーションの嵐となり、海外公演でこのような喝采を初めて経験した学生たちは、文化の違いに驚きながら感激した様子であった。

5) 小学生を対象としたワークショップ(ハワイ島)

9月22日(木) 琉球芸能ワークショップには、カヒル地域4校の小学生たちが授業の一環として参加した。

はじめに琉球芸能鑑賞会で琉球舞踊4曲と琉球音楽・楽器の紹介を行った。小学生に親しみやすい演目を選択し、また楽器紹介の際は学生たちがみずから沖縄の音楽ではなく、クリスマスソングや童謡のような曲をアレンジして琉球楽器を紹介した。子供たちの中からは驚きの様子とともに、笑声が聞こえる一場面もあり、楽しんでいる様子がうかがえた。そして後半には琉球舞踊の手踊りの基本を紹介し、カチャーシーの音楽に合わせてのびのびと楽しく体験してもらった。

公演終了後、ハワイ語で教育を受けているイメージンスクールの子供たちが、誰ともなく立ち上がり、アカペラによるハワイ語の歌で感謝の気持ちを私たちに伝

えてくれた。子供たちのまっすぐな気持ちは、一人一人の胸に響き渡り、ハワイの人々が受け継いできた文化の温かさと優しさを知る貴重な機会となった。

ハワイの先住民には、沖縄と同じ「イチャリバ兄弟^{チャーデー}」の教えがある。それは、同じ場を共有した人々は家族として歓迎する、との共存の精神である。先住民の文化が子供たちに確実に浸透しているを感じた瞬間でもあり、あらためて、ハワイ独自の文化を継承する伝統教育の素晴らしさを実感した。（※小学生を対象としたワークショップは、同様な内容でオアフ島でも実施した。小学生の異文化に対する興味は大きく、積極的に質問に答え踊りを楽しんでいた。）

6) ハワイ大学マノア校オービスホールにて琉球芸能交流公演「綾虹の踊り」 (オアフ島)

9月24日(19:30～21:30)・25日(16:00～18:00)の両日、ハワイ大学マノア校の音楽学部オービスホールにて、琉球芸能交流公演を行った。400名収容のホールは両日ともほぼ満員で、県人会をはじめ学生や関係者など多くの観客が来場した。

はじめに、今回の企画展示と公演「綾虹 AYANUJI」の趣旨について、波照間永吉前附属研究所長が説明した。つづいて演目解説を行い、同時に芸大の国際交流コーディネーターでハワイ出身の儀保ダーシーさんが通訳を担当して舞台進行をした。

琉球芸能公演に参加したのは、県立芸大からは比嘉康春学長、比嘉聡教授、筆者、学生4名、大学院生2名、博士課程学生4名、OB3名、舞台監督1名の計17名と、ハワイ大学からはノーマン金城氏、ハワイ大学学生3名、県費留学生1名の計5名、総勢22名で舞台をつとめた。

第1部のプログラムは、「芸能文化を通してハワイと交流」と題し、55分のステージで古典舞踊4曲・雑踊り2曲を披露した。幕開け斉唱では、ハワイ大学音楽学部で「琉球古典音楽」の講師を担当しているノーマン金城氏（野村流）とそのクラスの受講生と県費留学OBの12名で、舞台を通して演奏交流を図った。

（※ハワイ大学マノア校音楽学部では1960年より、琉球古典音楽や琉球舞踊の講義が、県系人の講師によって指導されている。）

第2部では、「民俗芸能からの影響」と題し、40分のステージで創作舞踊2題・民俗舞踊2題を披露した。ここでは、同時期に東西センターギャラリーで催された展示を紹介する舞台として関連づけ、プログラムを構成した。「こねりおもしろ」

を引用して、祭祀芸能から成り立つ琉球舞踊の神聖な世界を、女性たちのアカペラの歌と囃子で表現した。

つづいて小浜島に伝わる民俗芸能「ダートゥーダー」を披露した。この演目については、展示会で仮面を展示することが決まったときに、沖縄の伝統文化をよりわかりやすく伝えたいという思いから、小浜島に赴いて関係者の方々から承諾をいただき、在沖小浜郷友会の指導を受けて演目に加えることができた経緯があった。観客からも「初めて見る演目で、とても面白く、もっと沖縄各地の民俗芸能を見てみたい」という感想が多く寄せられた。

この演目を担当した学生からは、「面をつけて組み体操のような動きをするなど、琉球舞踊とは大きく異なる演目で難しかったが、練習を重ねるごとにその面白さと互いのタイミングや息づかいがつかめ、民俗芸能の楽しさと意義を実感することができた」との感想もあった。

そして、あらためて小浜島の方々のご理解とご協力により、島の大切な民俗芸能をご指導いただいてハワイの地で発表できたことは、ハワイの方々そして学生にとっても、貴重な機会となった。

フィナーレでは、獅子舞につづき、ジュリ馬そしてカチャーシーと雰囲気が一気に盛り上がり、県人会の方々も率先して舞台上で喜びを全身で表現し会場が一体となり、スタンディングオベーションで幕を閉じた。公演終了後もその感動は冷めやらず、観客と出演者がロビーで写真撮影や握手やハグで、公演の成功と感謝と感動を伝え再会できたことを喜び、そして「また来てください」と次回への再会を約束して、しばらくその場ではたくさんの笑顔と涙で喜びを分かち合った。

公演プログラムは以下の通りである。

東西センター展示関連：琉球芸能公演「綾虹の踊り」

第1部：芸能文化を通してハワイと交流（55分）

1. 「かぎやで風」 地謡：比嘉康春 比嘉聰 和田信一 大城貴幸 徳田大樹
仲嶺良盛 糸数奈美 ブランドン・イング（県費留学
OB） ハワイ大学ノーマン金城講師 UH 学生
舞踊：中村知子 山里静香
2. 「若衆こてい節」 仲宗根杏樹 渡嘉敷彩香 伊波留依 高里風花
3. 「苧引き」 比嘉一恵

- 4.「高平良万歳」 比嘉いずみ
- 5.「谷茶前」 仲宗根杏樹 渡嘉敷彩香 伊波留依 高里風花
- 6.「エーク踊」 比嘉一恵
- 7.「黒島口説」 中村知子 兼島翔子 山里静香 仲宗根杏樹 渡嘉敷彩香
伊波留依 高里風花

第2部：民俗芸能からの影響（40分）

- 1.「こねりおもろ」 中村知子 兼島翔子 山里静香 仲宗根杏樹 渡嘉敷彩香
伊波留依 高里風花
- 2.「鳩間の主」 比嘉いずみ
- 3.「ダートゥーダー」 （舞踊）中村知子 仲宗根杏樹 渡嘉敷彩香 高里風花
（仮面）山里静香 伊波留依 和田信一 徳田大樹
- 4.「獅子舞」 比嘉一恵 儀保ダーシー
- 5.「フィナーレ」 全員



ハワイ大学マノア校オービスホールにて
琉球芸能公演



琉球芸能公演フィナーレ

7) 県立芸大工芸ワークショップ

2016年10月29日（土）～30日（日）の2日間、東西センターにおいて県立芸大の講師陣12名による紅型教室、織物教室、陶芸教室が行われた。対象年齢は10歳以上とし、沖縄の工芸に触れる機会として、多くのハワイの方々に沖縄伝統工芸の体験を楽しんでもらった。

8) その他関連催事

展示会が開催されている2016年9月25日～2017年1月9日の期間中、東西センター企画による関連催事で、沖縄の歴史や文化についてより深く知る機会を提供することを目的に、ハワイ大学マノア校の教員やハワイ沖縄県人会の協力を得て、下記のイベントが開催された。

- ① 10月2日(日)ハワイ沖縄研究センターのジョイス知念所長による講話「沖縄人」
- ② 10月16日(日)金武流仁風会の仲宗根芳江ハワイ支部による「琉球舞踊鑑賞会」
- ③ 11月6日(日)ハワイ大学のスチュワート・カーリー教授による講話「沖縄方言」
- ④ 11月13日(日)東西センターのロバート仲宗根氏による講話「沖縄方言」
- ⑤ 12月4日(日)映画『ナビィの恋』(中江裕司監督)上映
- ⑥ 12月11日(日)野村流古典音楽協会のノーマン金城師範による「琉球音楽紹介」
- ⑦ 1月8日(日)安富祖流古典音楽朝一会のサンダー村田師範ほか「琉球音楽紹介」

(3) 課題と展望

県立芸大30周年記念事業の一環として、ハワイにおいて交流事業が行えたことは大変意義の深いことであった。多くの方々の協力とさまざまなつながりとご縁があってこその実施であった。

県立芸大とハワイ大学マノア校および東西センターとの交流協定は、以前より可能性を模索するために、筆者を含め芸大教員が幾度か訪れていた経緯もあり、前述した通り、波照間・小西・仲本教授や筆者らの調整を経てこの事業を締結できたことは大変感慨深い。相互にとって今後大きな発展につながると思う。

ハワイと沖縄の両島は、歴史・文化・自然・環境など不思議なほど似通った点が多くあり、ハワイに住む沖縄県系人は現在、約4万人とも推定されている。ハワイに住む沖縄県系人の方々は、アイデンティティーを確立するため、特に琉球芸能(歌三線・舞踊・箏・笛・胡弓・太鼓)や沖縄語(ウチナーグチ)を大切に継承している。

また、異国の地で生まれ育った3・4・5世の子供たちにも、ウチナーンチュのチムグクル肝心チムグクルは確実に引き継がれており、さまざまな催しの場で芸能を演じ親しまれている。その中でも、県費留学制度(約35年間)を活用して沖縄の地で学んだ若者は数多く、特に県立芸大で琉球芸能を学び習得した技と知識を生かして、現在では指導者や実演家として活躍し、伝統芸能の価値を高め世界に広く発信している。あらためて県費留学制度の意義を感じ、今後も沖縄県がこの事業を継続する必要性のあることを実感した。

学生とともに、3回のワークショップと3回の琉球芸能公演を行い、多くのことを経験し学ぶ貴重な機会となった。特に16名で約2時間の芸能公演を行うにあたり、群舞の演目をつづけて行うプログラム構成の中で、民俗芸能のダートゥーダー

は8名の出演者が必要であるため、地謡のメンバー2名にも立ち方として参加してもらった。本人たちも「慣れるまでは大変だったが、次第に呼吸やタイミング、動きも合わせられるようになり、貴重な体験を楽しむことができた」と話していた。

そして、海外の、場所や条件の違う空間と限られた時間で催しを実施したのであるが、さまざまな条件に対応してスムーズに実施できたことについては、プロの舞台監督・池宮一氏（琉球新報社）のご尽力が大きかったと思う。舞台進行上、その役割の大きさを感じ、今後、海外公演を行ううえで参考となった。

この事業を通して、東西センターの献身的なサポートや、ハワイ島での子供たちの心のこもった感謝の歌、またハワイ沖縄県人会の方々へのあたたかい励ましや拍手などは、それぞれ、学生たちそして筆者の心にも大きく響いた。最終日に東西センターの敷地内で行ったアロハパーティーの際、県立芸大学生たちから感謝の歌と踊りが披露された。博士課程の大城貴幸さんが作詞作曲した「マハロ・ジントーヨー」である。これは、マハロ（ハワイ語で「ありがとう」）とジントーヨー（琉球語で「本当に」という意味）を合わせた造語で、今回のハワイ滞在中に生まれた思いがけない産物となった。学生たちはハードスケジュールの中、早朝に宿舍の庭で練習を重ねてその曲に振付をし、思いがけないサプライズ企画を披露した。東西センターの職員をはじめ、県人会の方、芸大関係者など、会場の人々を感動させるに十分なサプライズは、ハワイと沖縄の血のまじり合った友情と交流の象徴の誕生であった。一堂の人々は皆、目に涙を浮かべて喜んだ。

7日間という短い期間ではあったが、学生たちはたくさんの方々への感謝の気持ちを、歌と踊りで表現することができた。これは、イマージョンスクールの子供たちの素直な表現を目の当たりにし、海外で沖縄独自の伝統文化の素晴らしさを再確認できたからだと感じた。歌詞の中には琉球語とハワイ語が織りまぜてあり、その中には双方の島の人々が祖先から受け継ぐ精神と文化を大切に継承していきたいという思いが歌われていた。

この事業を通して、成長した学生たちの感性の豊かさと、今後の可能性を実感し、交流事業の素晴らしさを感じることもできた。

3-3 沖縄県立芸術大学リカレント講座 in ハワイ

(1) 概要

「平成 29 年度 沖縄県立芸術大学附属研究所しまくとうば実践教育事業」の一環で「リカレント講座」を行うことを目的に、2018 年 3 月 23 日（金）～ 28 日（水）ハワイ・オアフ島を訪問した。

これまでにハワイでは、筆者自身が県費留学 OB からの依頼で 2015 年 3 月に 1 度行い、同年 7 月には「ハワイ & 沖縄姉妹都市締結 30 周年記念事業」の際に、琉球芸能に関する「結髪」「着付け」「化粧」のワークショップを学生とともにやってきた経緯がある。

今回は、沖縄県立芸術大学主催の講座として、「琉球芸能史概説」（鈴木耕太・附属研究所講師）、「舞踊琉歌詞章解説Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（波照間永吉・附属研究所教授）、「琉球史概説Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（麻生伸一・音楽学部准教授）、「組踊の鑑賞法Ⅰ・Ⅱ」（鈴木耕太・附属研究所講師）、「歌三線Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」（仲嶺伸吾・音楽学部教授、大城貴幸助手）、「琉球舞踊Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ」（筆者、山里静香助手）、と、3 日間で 20 コマの講座を行った。琉球舞踊の講座では、舞踊Ⅰ「実技（瓦屋の前半）」、舞踊Ⅱ「着付け」、舞踊Ⅲ「結髪」、舞踊Ⅳ「化粧」、舞踊Ⅴ「実技（かぎやで風）」、舞踊Ⅵ「実技（瓦屋の後半）」の計 6 回の講座を、大学院生（博士 2 年）の山里静香と筆者とで担当した。

(2) 内容

1) 1 日目（3 月 23 日／金曜日 場所：ハワイ沖縄センター）

A：舞踊Ⅰ「瓦屋」実技（16：30～18：00）参加者：約 20 名

はじめに、舞踊の基本である「姿勢・丹田・歩み」について説明した。それできるだけイメージしやすい言葉として「しまくとうば実践教育」の授業で、宮城幸子先生より教わった「マチジカラ チビヌミーマディ フィトチ」「チブイ」「シナヌ ナーカンカイ アシ イッティ、シナ トゥバサンダートゥ アシ ンジャスン」を訳して参加者に伝え、基本練習を行った。

筆者の感触としては、参加した初心者・経験者ともに動作のイメージがつかめたようで、短時間ではあったが練習の成果がうかがえ、適切な言葉で指導する必要性を実感した。そのあとの実技演習で「瓦屋」を披露し、参加者に出羽「なからた節」の部分を覚えてもらい、地謡の音楽に合わせ全員で 5 回ほど踊った。

2) 2日目 (3月24日／土曜日 場所：曹洞宗寺院)

A：舞踊Ⅱ「着付け」(13:30～14:30) 参加者：約20名

事前に県費留学OBから希望のあった着付け法を中心に講座を行った。はじめに「大帯」の正式な締め方を実演し、略式の帯との違いや、帯を締めるときのポイントを説明した。つづいて同じ要領で、参加者の中からモデルを立てて「ウシンチー」「紅型」「二歳衣装のあずまからげ(2通りの方法)」を紹介した。

B：舞踊Ⅲ「結髪」(14:30～15:30) 参加者：約20名

こちらでも参加者の中からモデルを立て、「女性結髪：入り髪を使用した、カラジ結」と「男性結髪：カタカシラ」「古典女踊り：カムロ結」を紹介した。そしてジューファー(かんざし)や前花髪飾りの挿し方なども合わせて説明を行った。

C：舞踊Ⅳ「化粧」(15:30～16:30) 参加者：約20名

「結髪」でモデルをつとめてくれた2名には、引きつづき化粧のモデルとなってもらった。「カラジ」を結った方には、女性の舞台用化粧(照明がある場合)、「カタカシラ」を結った方には、男性の自然体化粧(野外等で踊る場合)の2通りを行った。

ハワイでは野外で踊る機会が多く、通常の舞台化粧で踊った場合かなり違和感がある。そこで今回は、筆者自身の経験から、場所や環境に合わせた化粧法を紹介したところ、参加者は大いに興味を示し、メモを取りながら熱心に聴いていた。

3) 3日目 (3月25日／日曜日 場所：曹洞宗寺院)

A：舞踊Ⅴ「かぎやで風」(13:30～14:30) 参加者：約15名

1日目に参加した方と、若干入れ替わりがあったため、前半では基本の「姿勢・丹田・歩み」を確認し反復練習を行った。そのあと体の使い方のイメージを説明し、所作と歌詞の表現を確認した。後半では扇子を持ち、曲に合わせて5回ほど踊り、最後に所作についての質疑応答を行った。

B：舞踊Ⅵ「瓦屋」(14:30～15:30) 参加者：約10名

計画では、歌三線受講生のための舞踊を行う予定であったが、希望者がいなかったため参加者に確認を行い、急遽、合同発表に向けての指導に変更した。1日目の古典女踊り「瓦屋」の中踊「瓦屋節」と入羽「しょんがない節」の指導を行った。前半では手順を覚え、後半は座学の「琉歌詞章解説」で学んだ歌詞のイメージと所作を照らし合わせながら、音楽に合わせて全体を通して踊った。

C：舞踊・歌三線の成果合同発表（15:30～16:20）

今回の講座で学んだ実技「かぎやで風」「語り組踊」「瓦屋」3演目の成果発表を行った。受講生にとっては短期間の講義ではあったが、それぞれの成果が見える発表となった。

4) 参考資料「琉球舞踊関連シラバス」

ハワイ県費留学生OBを対象とした「琉球舞踊リカレント授業」 ガイダンス

沖縄県立芸術大学 琉球芸能専攻

比嘉いずみ(講師)・山里静香(助手)

琉球舞踊の実技に対する基本的な知識と技法について、シマクトゥバを通して学ぶ。また、琉球舞踊の舞台活動で必要不可欠である扮装方法についても学ぶ。

具体的には、①身体技法および舞踊技法の基礎的理論、②琉球舞踊に伝承されたわざ言語、または、シマクトゥバを使用して実技演習、③琉球舞踊の化粧・結髪・着付け方法の3点を中心に授業を行う。

授業計画

渡航期間			2018年3月23日(金)～3月26日(月)
	月日	時間	内容
1日目	3月23日(金)	90分×1コマ	1. 実際に踊り始める前に、基本的な舞踊技法（丹田の意識）についてウォーミングアップをしながら意識方法を習得する。 ・琉球舞踊「瓦屋」の舞踊解説を行い、所作の意味と動きの整合性を図る。 ・琉球舞踊の要ともなる姿勢と歩みのトレーニングを行ったあと、実技演習を行う。
2日目	3月24日(土)	60分×3コマ	1. 着付け（大帯・紅型・ウシンチー等） 2. 結髪（カタカシラ・女カラジ・カムロ） 3. 化粧（男・女／照明のある舞台編・野外編）

3日目	3月25日（日）	90分×2コマ	1. 1日目に行った実技演習の復習 ・琉球舞踊の中でもっとも多く踊られる「かぎやで風」について再確認を行う。舞踊解説を行い、所作の意味と動きの整合性を図る。 ・「かぎやで風」で使用する扇子の各名称・基本的な持ち方など確認する。 2. （成果発表会）3日間で行った授業の成果発表として、三線と琉球舞踊の合同舞台発表を行う。扮装も行い、実際に舞台上で「かぎやで風」と「瓦屋」を披露する。
-----	----------	---------	--

（3）課題と展望

過去に県費留学 OB からリカレント講座の要望があり、今回3日間の短期間ではあったが、座学と実技を合わせて20コマの講義ができたことは、有意義であった。しかし1日当たりの時間が長かったため、参加者の負担も少し感じられた。今後もこのような講座を継続して行うことで、沖縄とハワイ（その他県系人居住地）、双方にとって沖縄の文化の普及・継承・発展につながる機会になるとあらためて感じた。



結髪実習（カラジ）



琉球舞踊実技

4. インドネシア国立芸術大学デンパサール校との相互交流

(1) 概要

2019年12月25日(金)～12月31日(木)の7日間、沖縄県立芸術大学と姉妹校協定を締結しているインドネシア国立芸術大学デンパサール校（ISID と略記）へ、教員2名（久万田晋教授と筆者）、非常勤講師1名（與那城常和子）で県立芸大芸術振興財団の教育研究活動助成事業として訪問した。目的は文化的教育相互交流の促進と、そのプロセスを通じて沖縄・バリ島双方の民俗文化を反映した舞踊作品の合同創作を試みるとともに、沖縄とバリ双方の舞踊家・音楽家が参加するバリ島での舞台公演制作の可能性を調査した。そして、デンパサール校舞踊学科の学生を対象に、琉球舞踊のワークショップを開催した。

(2) 実施内容

1) 調査研究の成果

- ①：ISID のガルワ副学長・榊原茂美講師とともに、デンパサール日本総領事館を訪問し、千葉広久総領事・大橋貢一主席領事と面談して、今後の協力と支援を依頼
- ②：沖縄で公演実績のある現地の舞踊家イ・マデ・ステジャ氏とスアンダ氏を訪問
- ③：ISID を訪問し、「ジャワ・ガムラン」「舞踊社会学」の授業見学
- ④：ISID のスギアルタ学長を表敬訪問
- ⑤：両姉妹校による交流公演の可能性についての会議（参加者9名）
 - ・県立芸大から3名（久万田晋教授・與那城常和子非常勤講師・筆者）
 - ・ISID から6名（ガルワ副学長・スディルガ伝統芸能学部長・カリアサ伝統音楽科学科長・ウィドニア影絵人形芝居学科学科長・スリスティヤニ舞踊学科学科長・榊原茂美美術学部講師）
- ⑥：プリンプラン村見学・ISID のガルワ副学長宅訪問
- ⑦：バリ・アゲン鑑賞・ISID のスダナ教授（影絵人形芝居科）宅訪問
- ⑧：ISID にて、琉球舞踊ワークショップを開講
- ⑨：ISID のウダヤナ美術学部長と面談
- ⑩：ISID のキャンパス内を見学

⑪：姉妹校留学生の鈴木一平さん（美術工芸学部工芸専攻4年次）と面談

2) 琉球舞踊ワークショップ

2019年12月30日（月）10:30～12:00 インドネシア国立芸術大学デンパサール校の舞踊教室において、舞踊学科の学部生31名（男性16名・女性15名）を対象に、琉球舞踊のワークショップを開催し、前半に男踊り「前の浜」を、後半に女踊り「浜千鳥」の2曲を体験してもらった。

1曲目「前の浜」は、空手の要素が多く含まれた手踊りで、手拍子や足拍子など、リズムに合わせて拍子を取るのが特徴である。はじめに基本の動作である、摺り足と腰の入れ方を指導したところ、スムーズに体得することができた。そのあと、踊りのイメージをつかんでもらうため、実演を行い、1節と2節の手順を覚えたところで、曲に合わせて全員で踊った。

2曲目「浜千鳥」は、琉球舞踊の基本の手とされる3つの所作、拝み手・こねり手・押す手を多く用いた手踊りで、旅愁をテーマにした歌詞の内容と音楽に合わせ、穏やかな波のうねりのように舞うのが、この演目の特徴である。まず基本の手である、拝み手・こねり手・押す手の、名称と動作の意味を説明し、つづいて1節の手順を覚えてもらい、曲に合わせて反復練習を行った。そして、学生1名をモデルにして、琉装（結髪・衣装の着付け）の実演を行い、最後に全員で音楽に合わせて踊った。



琉装の実演



琉球舞踊ワークショップの様様

(3) 課題と展望

今回の訪問の中で、「姉妹校による交流公演の可能性について」の会議を行い、提案した交流事業についてインドネシア国立芸術大学デンパサール校でも早期にぜひ実現させたい、との意向を確認することができた。また、ガルワ副学長・榊原茂美講師とともに、デンパサール日本総領事館を訪問した際、千葉広久総領事

と大橋貢一主席領事も可能な限り協力と支援をしてくださるとの回答をいただいた。今後は姉妹校双方で情報共有を行いながら、交流事業を実施するための資金獲得と、事業計画に取り組んでいく。そして、影絵人形芝居科のスタナ教授から提案いただいた双方での合同研究に向けても、態勢をととのえながら前向きに取り組んでいきたいと思う。

また、舞踊学科の学生を対象としたワークショップを通して、バリ舞踊と琉球舞踊には類似する所作や動作が多くあり、学生たちの吸収力がかなり早いと感じた。そして、ガムラン音楽と琉球音楽にも共通する部分が多くあり、双方の音楽と舞踊を生かしたコラボ作品を創作することで、異文化交流を通して学生の視野と表現の幅を広げる機会ともなるため、姉妹校交流の一環として実現できるように検討していきたい。

5. まとめ

これまで海外で行ったワークショップ、集中講義、公演、交流事業を通して、各大学のカリキュラムやその効果など、学生たちはもとより、筆者自身も多くのことを学んだ。他国の文化を知ることによって自国の文化を知り、さらにその特徴を確認するという、貴重な機会となった。以下にその成果をまとめる。

1. 韓国・蔚山大学校との交流・公演を通して、学生は独自の文化を継承する意義を再確認できた。実践教育は学生たちにとって貴重な経験であり、今後アートマネジメントに関する手順や方法・助成金の活用方法を学ぶことで、将来の活動に生かされる。本学の専任教員と連携を取り、学生たちの積極的な文化発信と舞台経験の場をサポートできるよう、環境をととのえていく必要がある。

2. 台湾・国立台北芸術大学での講義・公演・交流を通して、身体表現を効果的に習得するためには、高校と大学が連携して一貫芸術実践教育を行うことが重要である。台北芸大では芸術表現の根幹となる基礎力を高校3年間で身につけ、大学ではその上にさまざまな身体表現法や心技体の確立、表現法の分析など、多角的視点で芸術表現を学び研究するシステムが確立されている。集中講義で学生たちの実技習得の速さ、その背景を学ぶことができ、本学のカリキュラム構築に役立てたい。また、社会と大学が連携を図り、効果的な人材活用として、大学で学んだ技術と知識を生かし卒業生が活躍する場を広げることも、重要課題であると感じた。

3. ハワイ大学および東西センターでの講義・公演・交流を通して、学生は伝統文化の価値を海外で再確認し、また大学での学びの意識を高めるとともに、その方向性をみずから気づく貴重な体験となった。沖縄県内の学校教育（小・中・高校）においては、独自の伝統文化について見聞を広める機会がほとんどないのが現状である。しかし、沖縄から離れてはじめて、文化のもつ力や、望郷の念をつなぐのが歌や踊り、そして故郷の言葉であることに気づく。たくましく優しく共存できる人材育成を考え、独自の文化について教え導くことが、これからの教育機関に求められる時代になっていると考える。そして大学における伝統芸能・文化の教育の在り方も、ハワイの文化復興を参考にしながら、取り組んでいきたい。また、現地における県費留学 OB・OG の活躍は県人会の範囲にとどまらず、社会への貢献も高い評価を得ている。本学がハワイ沖縄県人会との連携を強化することにより、双方にとって沖縄の文化の普及・継承・発展につながる機会になると感じた。

4. インドネシア国立芸術大学デンパサール校との相互交流を通して、姉妹校による交流公演の可能性を確認し合意を得ることができた。バリ舞踊と琉球舞踊には類似する所作や動作が多く、またガムラン音楽と琉球音楽においても音階などが共通している。双方の音楽と舞踊を生かしたコラボ作品を創作することで、異文化交流を通して学生の表現の幅を広げる好機となると感じた。教育の一環として学生とともに国際交流公演を行うことで、アジアに共通する文化の特徴を学び、視野を広げる機会となる。今後は姉妹校双方で情報共有を行いながら、交流事業を実施するための資金獲得と、事業計画内容に向けて取り組み、また教員間での合同研究に向けても、態勢をととのえながら前向きに取り組んでいく。

上記のことから、共通する事柄として、次の点が上げられる。

- ①海外における文化交流やワークショップ・公演を通して、伝統文化の価値を再確認し、大学での学びの意識を高めることができる。
- ②学生主体で実施する文化発信（舞台公演・アートマネジメント）は、将来の活動に生かされ、大学において基本的な知識を学び、実践を通して身につけることができる。
- ③社会において文化・芸能の果たす役割を、みずからの経験を通して実感し、学ぶことができる。

以上を念頭に置きながら、伝統芸能を大学で学ぶ教育環境の充実とカリキュラム構築、そして最善の指導法を確立していきたい。

また、これまで他国との文化交流を通して、沖縄の伝統文化・芸能がいかに貴重な財産であるかを、あらためて確認することができた。それらを幼・小・中・高校の教育に取り入れることで、次世代を担う子供たちが、すべての人々を受け入れ、柔軟な心と優しさを育むことができるにちがいないとの思いを強くしている。

謝辞

これまで、海外で琉球舞踊のワークショップ・集中講義・公演など、実践教育の機会を通して、琉球舞踊の実演家として貴重な経験をさせていただき、多角的な視点から身体表現の指導法を学ぶことができました。本学はじめ、受け入れ先の大学や関係機関のみなさまに、厚く御礼申し上げます。

今回、拙いながら、これまでの舞踊教育の実践について、ご報告させていただきます。執筆にあたっては、波照間永吉先生、久万田晋教授に懇切なご教示をいただきました。心より感謝申し上げます。

参考文献

- ・『綾虹ぬ踊い』パンフレット 2016年9月24・25日／ハワイ東西センター作成
- ・『平成29年度沖縄県立芸術大学教育研究支援資金〈琉球芸能の台湾での普及に向けた実践的研究〉沖縄県立芸術大学 & 国立台北芸術大学 姉妹校国際交流事業 国立台北芸術大学芸能公演 報告書』沖縄県立芸術大学音楽学部 2018年3月31日
- ・『平成29年度ハワイ大学等交流事業報告書』しまくとぅば実践教育プログラム開発事業 島嶼学学術交流事業 沖縄県立芸術大学附属研究所 2018年3月31日
- ・『平成31年度沖縄県立芸術大学教育研究支援資金事業報告書 沖縄・バリの交流公演に向けての予備的研究—国立インドネシア大学デンパサール校との相互交流を通じて—』沖縄県立芸術大学紀要 2021年3月23日
- ・『琉球伝統演劇 & 舞踊の世界』パンフレット 2017年10月28・29日／開渡芸術祭：国立台北芸術大学作成